

アーサー・コナン・ドイル作  
伊豆野 良江訳

## クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

### 第十一章 難破船ベリント号

十月三日は雲ひとつない晴天だった。朝のうちはかすかに風が吹き、巨大な鳥の羽毛のような薄雲があちこち浮かんでいたが、そのうちに風がぱたりとやみ、空気が淀んで蒸し暑くなってきた。

この時期にしては珍しく、太陽はぎらぎらと照りつけていた。海峡の向こうのアイランドの山々は、高台の荒野一帯に立ち込めた霧にすっぽりおおわれていた。

海岸では、大きな波がゆるゆるとうねりながら打ち寄せては岩に砕け、単調でものうい音を響かせていた。いかにも穏やかで平和な景色だったが、このとき、大気にも空にも海にも、自然の警告を読み慣れた者だけにわかる、不吉な印が満ちていたのである。

その午後、わたしと妹は、アイランド海へ突出した大きな砂州のへりを散歩していた。片側はリユース湾、もう一方はカークメイダンの入江になっていて、ブランクサムわたしたちの地所は、その入江に面していた。一面に枯草に覆われた砂山が、海岸線まで無数にできていて、防波堤を作っていた。あまりの暑さに、わたしたちは少し歩いただけで、砂山の一つに腰をおろした。

それからまもなくして、ざくざくと砂を踏む重々しい足音がした。以前話に出てきた元水兵のセスで、小海老用の浅くて丸い網を担いでいる。わたしたちに気づいてこちらにやってくると、あとでブランクサムに海老を届けてやっからな、と言った。

「嵐の前には、うんと取れるでな」

「嵐が来るって、どうしてそう思うんだい？」

「そんなことあ、誰だってわかる」大きな楔形のパイプをくわえながら、セスは言った。「クルンバー館近くの荒地は、カモメで真っ白になってる。避難してきてるだよ。

嵐にあつたら羽根なんかひとたまりもねえからな。チャーリー・ネイピア号に乗ったとき、こんな日があつただ。おら、クロンスタットの沖にいたのに、砦の砲台まで押し流されちまつた。エンジンもプロペラもなんの役に立たねえ」

「ここら辺で船が難破したなんてこと、あるのかい？」

「あるもなんも、ここは難破船で有名な所だ。あの有名なスペインの無敵艦隊、その二隻が乗組員もろとも沈んでる。海がしゃべれたらいろいろ聞かせてくれるだろうよ。最後の審判の日じゃ、海の底から浮かび上がる連中がわんさかいるに違いねえ」

「わたしたちがここにいる間にそんなことがなければいいんだけど」エスタが心配顔で言った。

老人は霧のかかった地平線を眺めながら、白髪頭を振った。

「西から風が吹いてくりゃ、たちまちあそこの帆船のいくつかは立ち往生するさ。向こうにいるパーク船なんか、無事クライド湾にたどり着いたら上等ってもんだ」

「ちつとも動いてないようだ」わたしはその船を見ながら言った。黒い船体ときらめく帆が、大きな波にゆっくり上下している。「たぶん思い違いじゃないか。嵐なんか来る様子はまったくないよ」

老人はこれだから素人は困るというように含み笑いをし、海老の網を担ぐと行ってしまった。わたしたちも蒸し暑い中、ゆっくりと家路をたどったのだった。

わたしは帰宅するとすぐに、土地管理の仕事はないかと父の書斎に入った。最近では、東洋文学の研究に打ち込んでいる父に代わって、わたしが実務の仕事を受け持っていた。父は書き物机に向かっていたが、山積みになった本や書類の間からは、父の白髪頭の一部しか見えなかった。

「ジョン、お前かね？」父はわたしに気づくと言った。「お前がサンスクリット語に通じていないのは残念だ。サンスクリット語だけではない。わしがお前くらいのときは、タミル語、ロイト語、ガンゲス語、タイ語、マレー語など、ウラルアルタイ語族のすべてに通じていたもんだ」

「わたしがその素晴らしい語学力を受け継げなかったのは、残念ですね」

「わし手がけた仕事を、子孫が引き継いで完成させてくれれば、ウエスト家の名は永遠に刻まれるのだがね。釈迦生誕前のバラモン教を位置づけた序文を書き、達磨大師の教えを英訳して出版する仕事だ。死ぬまでに、頑張れば序文くらいはなんとか完成するかも知れん」

「完成するとどれくらいの長さになるんですか」

「北京の国立図書館の抄本はね」父は両手をこすり合わせながら言った。「各巻が大體五ポンドの重さで、三百二十五巻ある。序文では、リグヴェーダ、サマヴェーダ、ヤジュルヴェーダ、アタラヴァウヴェーダそしてブラーフマナについても述べなければならん。少なくとも序文だけで十巻にはなるだろう。一年に一巻と見積もっても、完成するのは二千二百五十年というわけだ。十二代目で仕事が終わって、十三代目は索引を作ることになる」

「でも、偉大な仕事を続けるのはいいですが、子孫はどうやって生活していくのですようね」わたしは笑いながら言った。

「それがお前の悪いところだ」父は機嫌を損ねて言った。「高邁なもくろみを実現し

ようとは考えもせずに、くだらんことばかり言つ。子孫が達磨の教えに取り組むことが肝心で、どうやって生活するかなどどうでもいい。それはそうと、ファーガスの小屋へ行って、茅葺き屋根を見てやつてくれ。それから、ウィリーの乳牛が病氣らしいから、ついでに寄つて見てきてくれるか」

わたしが出かける前に壁の晴雨計を見ると、驚くほど低気圧を示していた。元水夫だけあって、セスは自然を読み違えてはいなかったらしい。

夕方に荒野に戻つてくると、激しい突風が吹き、西の地平線付近には黒い雲が湧きあがつて、中天にその長い触手を伸ばしているところだった。

どす黒い雲の中に、まがまがしい黄灰色の斑点が現れた。磨き上げたなめらかな鏡のようだった海は、今ではすりガラスになっている。海は低いうなり声をたてて、嵐の来ることを告げていた。海峡の向こうでは、一艘の蒸気船が必死にベリファスト湾に向かおうとしており、また昼見た大型のバーク船は、北に針路を取ろうと沖合で悪戦苦闘していた。

九時になると風が強まり、十時には暴風に、真夜中近くには、わたしがこの海岸で経験した中でもっともすさまじい嵐になった。しばらくの間、わたしはオーク材を張った居間に座つて、吹きすさぶ風の音や、砂利がパラパラと壁に叩きつけられる音を聞いていた。自然のオーケストラは、たけり狂う波の轟音から、砂利のぶつかる音、そして怯えた海鳥の耳をつんざくような鳴き声まで、あらゆる音域にわたつて、その恐ろしい曲を奏でている。

ちよつとだけ格子窓を開けてみたが、激しく風雨が吹き込んだと思うと、大きな海藻が飛び込んできてテーブルの上にバサツと落ちた。結局、肩で窓を押しながら、ようやく閉めることができたのだった。

妹と父はそれぞれの部屋に引きあげていたが、わたしは頭が冴えて眠れそうもなく、くすぶっている暖炉のそばに座つて、たばこをふかし続けた。

クルンバー館ではどうしているだろう。ガブリエルはこの嵐をどう思っているだろう。夜間歩きまわる老人に何か変化があっただろうか。この恐ろしい自然の力を、自分の心配事と同じように、この世の定めと受け止めているのだろうか。それとも、命運がかかっている日まであと二日と迫つた今、この突然の嵐は恐ろしい運命の前兆と考えているかもしれない。いろいろな考えをめぐらせているうちに、いつしか暖炉の火も燃え尽きて寒気が身にしみてきたので、そろそろ部屋に戻ることにした。

二、三時間眠つた頃、肩を激しく揺さぶられて目を覚ました。ベッドに起き直ると、薄暗い枕元に上着を引っ掛けた父が立っていた。

「ジョン、起きるんだ！」父は叫んだ。「大きな船が座礁した。乗組員は助からんだろつが、行ってみよう。何かできることがあるかもしれない」

父は興奮し、かなりあわてているようだった。わたしはベッドからはね起き、大急ぎで服を着た。風と波の音に混じつて、ドーンという鈍い音がした。

「まただ！号砲を撃ってるんだよ。気の毒にな。セスや他の漁師たちが待っている。レインコートと帽子を忘れるな。急げ。一秒を争う事態だ」

わたしたちは階段を駆け下り、十人以上の漁師たちと一緒に海岸に急いだ。突風はますます吹きすさび、ごうごうすさまじい唸り声をあげていた。猛烈な風の中、砂や小石を顔に受けながら、前かがみになって進むしかない。

辺りは真っ暗で、見えるのは流れる雲と白い波頭だけだ。わたしたちは足首まで砂利や海草に埋もれながら、手をかざして暗闇に目をこらした。耳をすますと、悲鳴や助けを求める声が聞こえるように思ったが、すぐにすさまじい風の音にかき消されて、はっきりと聞き分けることができない。

突然、嵐の中に光がちらちらしたと思う間もなく、海岸と荒れ狂う海が煌々と照らしだされた。難船信号だ。

船はまさに恐ろしい岩礁の真ん中で転覆しかかかっていて、甲板の床がそっくり見えるほどに傾いていた。昼間海峡を航行していたあの三本マストのバーク船に違いなかった。何より、折れたマストに逆さまに引掛かっているユニオンジャックがその証拠だった。

船首楼の一番高い所で明滅している強烈な光は、帆柱からロープ、激しく揺れる索具までをもはつきりと照らし出していた。この悲運の船の向こう、真っ暗な沖合からは、所々白い波頭を見せながら、あとからあとから大きな波が押し寄せてきていた。そして、光の届く範囲に達すると、ますます勢いと大きさを増した波は、轟音をあげてその哀れな船に襲いかかっていく。

船内では、十人ほどの船員が必死で帆柱にしがみついていたが、青白い顔をこつちに向けて、死にも狂いで手を振りだした。明かりの中にわたしたちの姿を認めて、新たな希望にすがりつこうとしているのだらう。船のボートは波にさらわれたか、壊れて使えない物にならなくなったに違いない。

しかし、生存者はこれだけではなく、壊れかけた船尾にも三人の男が立っていた。怯えて懸命に救いを求めている船員たちとは、明らかに様子が違っていた。三人は折れかけた手すりにもたれて、死の危険が迫るのも気づかぬように、平然と何かを話し合っている。信号灯が彼らの真上にきたとき、三人が赤いトルコ帽をかぶり、東洋人特有の大きな浅黒い顔をしているのがわかった。

そうしているうちにも、船はみるみる破壊されていき、一瞬の猶予もなかった。一刻も早く手を打って、あの哀れな人々を助けなければならない。救命艇は、一番近くても十マイル離れたリユース湾にしかないが、この浜には幅の広いボートが一艘あるし、勇敢な漁師たちもいる。わたしたち六人はさっそくオールに飛びつき、残りの者はボートを押し出した。大波に翻弄されながらも、猛り狂う海との必死の格闘が続くうちに、着実にバーク船とボートとの距離は縮まっていった。

しかし、ボートが高く持ち上げられたとき、他の波を追い立てながら押し寄せる、ひととき大きな波を目撃した。あつという間に、それが緑の巨大なアーチを描いて、壊れ

た甲板に襲いかかった瞬間、すべては徒労かと思われた。

船はノコギリ状になった恐ろしい岩礁にたたきつけられて、竜骨が切り裂かれ、メリメリという轟音とともに、真つ二つに折れてしまった。船の後半部は折れた後檣や三人の東洋人とともに、深い海に没して見えなくなった。しかし、前半部は揺れながらも、なんとか岩の上で危ういバランスを保っていた。難破船からも浜辺からも恐怖の叫び声があがった。わたしたちが船首にたどり着き、乗組員全員を救助することができたのは、神の御加護としか言いようがない。

半分も戻らないうちに、次の大波が来て岩礁の上の船首もたたき落とした。そのとたん、信号灯が消えてあたりはまた真つ暗闇に包まれた。

岸にいた仲間たちは歓声をあげて祝福し、わたしたちの勇気をたたえた。そして、すぐさま遭難者たちを元気づけ、励ましたのだった。間一髪で死神の手を逃れたのは十三人で、皆寒さに凍え、怯えきっていた。ただ一人、船長だけは肝のすわった屈強な男で、まったく動じていない様子だった。乗組員の何人かはあちこちの小屋に連れて行かれたが、大部分はわたしの家で面倒を見ることになった。わたしたちはありったけの乾いた衣服を与え、台所の火のそばで肉とビールをふるまった。メドーズという名の船長は、わたしの服を窮屈そうに着て客間に降りてくると、自らラム酒を水で割りながら、父とわたしに遭難の一部始終を語った。

「もし、勇敢なあなたがたがいらっしゃらなかつたら、われわれは今頃海の藻屑と消えていたでしょうな」船長はわたしに笑いかけた。「ベリンダ号は水漏れのおんぼろ船だし、保険もたんまり掛かっている。だから、船主もわたしもそれほど惜しくはないんだがね」

「でも、あの三人の乗客はだめでしょうね」父は暗い顔で言った。「万一浜に打ち上げられたらと思って、漁師を残してきたのですが、助かるとは思えません。船が真つ二つに折れたとき、海に落ちたのが見えました。あんな波に飲まれたらひとたまりもないでしょうし」

「あれはどういう人たちですか」わたしは尋ねた。「死に直面しても平気な顔をしていられるなんて、信じられませんね」

「彼らが誰であつたか」船長はパイプをふかしながら、考えこむように言った。「それを一言で言うのは難しいですな。最後に寄港したのはインド北部のカラチですが、そこでの三人を乗せました。グラスゴーまで行くということでしたよ。一番若いのはラム・シンといってね、わたしが話したのはこの人だけですが、三人とも物静かな、人あたりのいい紳士でした。仕事のことは聞かなかったが、ゾロアスター教の商人だと思えますね。商用でハイデラバードからヨーロッパに行くところだったんでしょうな。どういふわけか、船員たちは皆彼らを怖がっていていますね。分別のあるはずの航海士までもそうでした……」

「怖がっていたですって?」わたしは思わず叫んだ。

「そうです。あの三人を乗せると危険だという、ばかげた考えにとりつかれていたんですよ。今台所に行つてごらん下さい。きつとあの三人を乗せたから、遭難したんだと言ひ合つているにちがいない」

船長がそう話している最中に、客間のドアが開いて航海士が入ってきた。背が高く、赤いあごひげを生やした男だ。親切な漁師から借りたのか、一応まともな服装をしていた。温かそうなジャージーのシャツに油をたっぷり塗つた長靴をはいていて、難破船の乗組員としては上等と言えたらう。

航海士はわたしたちに礼を言つと、椅子を暖炉のそばに引き寄せ、大きな褐色の手を火にかざした。

「船長、どうです？」やがて、航海士は目をあげて問いかけた。「あんな黒ん坊を船に乗せたらろくなことになるいって、あつしは言いましたよね」

船長は椅子の背にもたれかかつて、さも愉快そうに笑い、わたしに言った。

「ほら、言つたとおりでしょ？」

「笑い事じゃない」航海士は腹だたしそうに言った。「あつしは上等な航海用具一式なくしちまつたんですよ。危うく命までなくすところだった」

「つまり、遭難したのはあの不運な三人のせいだということですか」

航海士は目を見開いて、わたしに言った。

「不運なだつて？」

「溺死したのは確実ですからね」

彼はばかばかしいというように鼻を鳴らすと、手を温めていたが、しばらくしてから言つた。

「やつらが溺れ死んじまつなんて絶対ない。なにしろ父親が悪魔ときてますからね。ご覧になつたでしょう？ マストが持つていかれて、ボートが吹っ飛んじまつたときも船尾で葉巻を巻いていた。それだけで十分だ。あなた方、陸の人間が信じないのはしょうがない。しかし、船長、羅針儀台くらいの背丈しかない頃から船に乗つてきたあなたのことだ。猫と坊主がタブーだつてことくらい、ご存じでしょ？ キリスト教だつてだめなのに、やつらは異教徒ときてる。古い宗教を否定するつもりはないが、あんなのはまっぴらだ！」

非常識なことを正論のように言つのを聞いて、父もわたしも思わず笑つてしまった。しかし、当人はいたつて真剣な表情で、左手のごつく赤い指先をみつめながら続けた。言つた。

「カラチでやつらが乗り込んできたとき、あつしはすぐに忠告しましたよね？」航海士はとがめるように船長に言った。「あつしの当直のときです。仏教徒のインド人水夫たちはどうしました？ 三人を見たとき、腹這いになつてデッキに鼻をこすりつけたじゃないですか。イギリス海軍提督に対してだつて、そんな真似しませんよ。連中は正体がわかつていたんです。わたしもやつらの顔を見るなり、ピンとききましたよ。後に、

あなたもいるところで、なんであんなことしたのか連中に聞いたでしょ？ そしたら、あの方々が聖者だからって答えたのは、お聞きになったでしょ？」

「だからって問題はないだろ？ ホーキンス」船長は言った。

「どうですかね」航海士は疑わしそうに言った。「キリスト教の聖者が神に一番近いとすりゃ、黒ん坊の聖者は悪魔に一番近いって話だ。航海中の様子は船長もご覧になったはずですよ。やつらは紙の本じゃなくて、木の本を読んでいた。それに一晩中、後甲板に立って何かしゃべったり、毎日自分たちの海図に航路を記したりしていた。いったい何のためですかね？」

「そんなことはしておらん」

「それがしていたんですよ。報告していなかっただけです。船長に言っても、いつも笑って取り合ってくれないんでね。それに、やつらは自分たちの計器まで持っていやがった。いつ使っていたかは知らないが…。船室のテーブルにはピンで留めた海図があって、毎日正午に緯度と経度を測っては、船の位置を記していましたっけ。あっしだけじゃない。賄い長も食料置場から見てるんです」

「確かに奇妙だが、それが何の証拠になるんだね？」

「妙なのはそれだけじゃない」航海士は勢い込んで言った。「われわれが難破した湾の名前をご存じですか」

「親切な漁師さんからウイグタン海岸だとは教わったが、湾の名前は聞かなかったな」「カークメイドン湾ですぜ」航海士は身を乗り出し、真剣な顔で言った。

彼が相手を驚かそうとして言ったとしたら、効果てきめんだった。船長はしばらく言葉を失ったのだから。

「そいつは驚いた」船長は一息つくくと、わたしたちの方に向き直って言った。「あの三人の乗客はね、船が出るとすぐにそいつ名前前の湾があるかと尋ねたんですよ。このホーキンスもわたしも聞いたことがないと答えました。海図ではリューズ湾に含まれているんでね。結局そこに流されて難破したとは、不思議なこともあるもんだ」

「そんな偶然があつてたまるかってんだ。昨日の朝、まだ波が穏やかだったとき、やつらは右舷後方の陸地を指さしていやがった。それが自分たちの目指す港だとわかっていたんだ」

「では、いったい君は今度のことをどう考えているのかね？」船長は戸惑って言った。

「あっしが思うに、やつらにとっちや嵐を起すことなんか、酒をあおるのと同じくらい簡単だったことですよ。やつらは、この神に見捨てられた港に、いや失礼、この港に来る理由があつた。だから、この海岸に吹き寄せられるように仕組んだってわけですよ。カークメイドン湾で何をしようとしていたかは、とんと見当がつきませんがね」父は眉をひそめたが、こつ言っただけだった。

「さあ、お二人ともあんな目にあわれたのだから、ゆっくりお休みになった方がいい。よろしかったら、お部屋までご案内しましょう」

父は昔風の作法で二人を客用の寢室に案内した。そして、また客間に戻ってくると、また浜辺に行つて様子を確かめてこようとわたしを誘つた。

遭難の現場に向かつて歩いてみると、東の空が白々と明けてきた。風は収まつていたが、まだ海は荒れていた。白く泡立ちながら猛々しく碎け散る波は、まるで獲物を逃して歯がみしているようだった

大勢の漁師や小作人たちが、海岸に打ち寄せられた帆柱や樽を懸命に拾つていたが、誰一人死体を見た者はなかった。彼らの話によると、海面に浮かぶ物しか流れ着くことはないということだった。激しい底流のせいで、いったん沈んだものは必ず外洋に流されるらしい。あの不運な乗客たちが岸にたどり着く可能性について聞くと、きつぱり否定し、万一溺死しなかつたとしても、岩にたたきつけられて粉々になっているだろうと言つたのだつた。

「やれることは全部やった」帰宅する途中、父は悲しげに言つた。「気の毒に、さっきの男は突然の災難で少しおかしくなつたのかもしれない。仏教徒の三人が嵐を起こしたなんて言つてたな」

「ええ、言つてましたね」

「聞いていられなかつたよ。耳の下に辛子膏薬でも貼つてやつたらどうだろう。脳充血には効くんだが。それとも、今起こして抗胆汁症の薬を二錠飲ますべきか、お前はどつ思つ？」

「ぼくの思つに」わたしはあくびをしながら言つた。「彼はこのまま寝かせておいて、お父さんも早く寝た方がいいでしょうね。明日の朝、必要なら薬を飲ませればいい」

そう言いながら、わたしはおぼつかない足取りで寢室に向かい、ベッドに倒れこむが早い、深い眠りに落ちたのだつた。